

# 日本のカナダ研究 —その現状と課題

ジェラルド・ライト

独自の文化や教育制度を保存することが要請されただけでなく、カナダの経験を徹底的に再検討し、そして国民史上初めてその独自性と意義を積極的に証言することが肝要とされた。カナダの人的、社会的、政治的特徴がもつ固有の価値と重要性に対し、カナダ国民がこのように確信を強めていったことが、国境をこえて、外国におけるカナダ研究を促進させる引き金となったのである。

以上のように両国の状況が重なり合っており、かなり多数のカナダ研究者が日本に輩出し、日本カナダ学会も結成され、研究者の努力と、カナダ政府からの技術的財政的援助とがうまく結びついて、これまでこの事は成功裡に進んでいる。すでにいろいろな成果が得られているが、一九七九年は、日本カナダ学会の評論誌

ここ数年、日本におけるカナダ研究は大きな進展を見た。この進展を強力に促したのは、いくつかの幸運な事情が重なったためであった。まず第一に、日本の研究者が大学の国際的方向を助長強化する方途を探し求めていたことがあげられる。そもそも日本の大学の国際志向は、歴史的に見れば慶応大学の創立者福沢諭吉にまでさかのぼり、古い歴史と伝統をもっているが、近年、日本が経済的にも政治的にも世界の大国として国際舞台に登場してくるにつれ、大学の国際的方向を求める声にも新たな緊急性が加わったのである。

第二の事情としては、一九六〇年代後半から七〇年代初期にかけて、カナダがナシヨナリズムの波を深くくぐり抜けたことがあげられる。その影響は今でもまだ感じとれるほどだ。そこで突如として、

一九七九年は、日本カナダ学会の評論誌発行の予定や、日加関係を討議する重要会議の八月開催など、一層の成果が期待されている。筆者はこの六か月間、日本の三つの大学でカナダの政治と外交政策について講義を行なってきたが、日本の学生と教師が示したすさまじいほどのエネルギーにいたく感銘せざるをえなかった。私の受持ったあるクラスなどは、同窓会を持つと言いつくすほどであった。

日本の教壇に立つてみて、筆者は三つのことを強く心に感じた。まず第一に、日本の学生にカナダのことを教えるのは、最初考えられていたよりもずっと難しく専門的な仕事である。少なくとも私自身の専門分野に関する限り、日加両国の政治ならびに社会はあまりに類似点が少なく、カナダが抱える問題の深さと重大さを日本の学生に理解させるのは容易なこ

とではないということだ。たとえば私が受持った学生たちは、ケベック州民の不満に関してはきわめて熱心に理解しようとする一方、カナダ連邦が分裂する可能性については頑として認めようとしな。そんなとき私は、この問題をめぐって相対立するカナダ人の感情の激しさを、果して学生たちにもうまく教えられたかどうか心配になることがある。それだけでなく、日本の学生が自国の政治に対して普通抱いている偏見にみちた態度のおかげで、カナダの政治と政治家に対しても冷笑的かつ悲観的な評価をしがちであることを知り、大いにショックを受けたのも事実だ。もちろん、学生たちのそのような結論は正しいのかもしれない。にもかかわらず、私たちは可能なかぎりかれらの見方にひそむ偏見を取り除こうとしなければならぬ。

第二に私が気づいたこと——それは、日本の大学で行なわれている他の教育・研究分野とカナダ関係の教科をうまく融合させるには、まだまだやらなければならぬ。この分野の教育研究を育成することが大いなる目的に直接役立つのだということとを、日本の大学の為政者たちに確信してもらわなければならない。カナダ研究の将来は絶望的といわざるをえない。たとえば、

両国が共通して直面している問題、だがそれへの対処の仕方が必ずしも同じでない問題が多数存在する。そのような問題を比較研究することの知的小よび実践的なメリットを、日本の大学人に示す必要がある。

最後に、私を迎えてくれた日本の方々

にはせんえつながら、日本の方々が多分果たすことができる特に貴重な役割を提案したいと思う。すなわち、カナダ人が自国および自国民に対してもっと正直に、もっと洞察力に富むようになる手助けをしてほしいということだ。日本の人々はその点で多くの事をする事ができると私は思う。この点では日本の学者は途方もなく有利な立場にある。結局のところ、日本の学者はカナダ人とは全く異なった価値と基準でカナダの問題を評価できるからだ。あるいはさらに重要なことだが、日本ではカナダを「全体」として眺めることができる。これはカナダ人には実際上全く無理なことである。「カナダ」という言葉でくくられる多くの社会運動、政治運動、あるいは知的運動が、その起源、目標、支持者などの点で、実は全くセクショナルなものであることを考えてみていただきたい。まだある。一九六七

年の万国博覧会の成功に気をよくして以来、カナダ国民は少々うぬぼれが過ぎているようであるから、ここから外国からの知的な批判や刺激を受けるのも悪くはない。古今東西、多くの社会が、外部からの焔眼な観察により大いに恩恵を受けてきた。アメリカ人でトックビル以上のアメリカ人観察をした人がいるだろうか。かくして日本のカナダ研究者がなすべき重要な課題が浮かび上ってくる。日本の研究者は、もはや傍聴席に座っている必要はない。一刻も早く自らオーケストラに加わり、自ら演奏をしていただきたいと思っている。(ライト氏は、三月に日本滞在を終え、ドナー基金IIトロントIIへ帰任した)